

平成31年度 学校自己評価システムシート (県立越ヶ谷高等学校 定時制の課程)

目指す学校像	基礎学力を身につけ、社会で主体的かつ前向きに生きることのできる人材の育成
--------	--------------------------------------

重点目標	1 授業改善を進め、基礎学力の充実を図る。 2 生徒の意欲・意識・モラルを高め、規律ある生活態度の確立を図る。 3 「命を大切に」教育と生徒間での望ましい人間関係づくりを推進する。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	8名
	生徒	3名
	事務局(教職員)	10名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 末 評 価 (2月 1日 現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度 次年度への課題と改善策
1	学習歴、年齢層、学力も多様な他、日本語を母語としない生徒も多数在籍している。そのため生徒の実態に応じ、個のレベルで学習意欲を向上させるための授業改善が課題である。 また、多様な生徒に対する個別指導の工夫と中途退学者を減少させることも課題である。	多様な生徒に対応するため、授業を工夫し改善を行う。	①授業研究月間として授業公開を行う。あわせて、年次研修者の研究授業・研究協議を毎学期行う。 ②県教委や外部主催の研修に参加し、その概要を報告する。 ③7月と12月に授業評価アンケートを全授業で実施する。	①授業公開の参加者数は増加したか。研究授業・研究協議が実施できたか。 ②研修参加者が増加したか。 ③授業評価アンケートで生徒の満足度と理解度は向上したか。	①11月の授業公開では36名来校した。(昨年度35名)また、初任者研修の研究授業を含め、研究協議を2回実施した。生徒の主体的な学びについて研究することができた。 ②県教委主催の悉皆研修はすべて参加した。外部機関主催の研修会に1名参加し報告を行った。 ③アンケートの結果、生徒の満足度と理解度は昨年とほぼ同様であった。	B ○生徒の主体的な学びを育成するために研究授業・研究協議の継続は必要である。 ○生徒の多様性に対し、学習支援が不足している現状がある。指導の在り方の研究が課題である。 ○県教委主催の希望研修への参加者を増やす必要がある。
		多様な生徒に個別に対応し、基礎学力を定着させる。	①学習サポーターや多文化共生推進員を活用して、個別の学習支援を行う。 ②英検、商業各種検定試験を奨励し、補習を行う。	①学期末の成績優良者が向上したか、また欠点保有者が減少したか。 ②各種検定にチャレンジできたか。受験者数、合格者数が向上したか。	①外部支援による個別指導により、成績優良者は27%と増加した。(昨年度26%)また、欠点保有者は8%と昨年と同様であった。 ②情報科及び商業科の指導により、今年度もビジネス文書実務検定試験を校内で実施し、22名受験し合格者6名となった。	A ○学習サポーターや多文化共生推進員は確実に効果をあげている。今後も増加することが予想される日本語を母語としない生徒への対応が課題である。 ○新教育課程の実施により、各種検定について精査する必要がある。
2	進路への意欲・意識等を高めるため、4年間を見通した進路指導計画は確立した。今後は、進路講演会の実施など進路指導の内容の充実が課題である。 特別活動への意欲・意識を高めるため、学校行事への参加状況や部活動の実績は向上した。今後は、生徒の企画運営能力を高めることが課題である。	外部の力を活用し、生徒の実態に沿った進路講演会等を実施する。	①就職支援アドバイザーのほか、外部講師を活用し、進路講演会を行う。 ②就労等を通じた指導を継続し、就職及び進学等の進路を見据えたキャリア教育を行う。	①卒業時の進路決定率が向上したか。 ②生徒が自分の進路を明確にし、校内での取り組みに積極的に参加できたか。	①活動中の生徒を含め、進路決定率75%となり昨年とほぼ同様になった。 ・就職支援アドバイザー13回来校 ②生徒の実態に沿った進路指導を計画通りに行った。 ・連携企業26社 ・サポステ面接6日、社会体験1日	A ○生徒の実態が変容している中、進路指導が実態に沿うように努力しているが、外部支援への対応が教職員にとってかなりの負担となっている。分掌等の組織編成等に工夫が必要である。
		生徒の学校生活への意欲規範意識を向上させるため、学校行事や部活動を通して生徒の企画運営能力を向上する。	①体育祭、文化祭等の学校行事において、生徒が主体となり活躍できる行事を行う。 ②部活動加入率、学校行事参加率を増加する。部活動の成果を向上する。	①各行事後に行われるアンケート結果で生徒の満足度が向上したか。 ②部活動加入率、学校行事参加率は向上したか。部活動の成果は向上したか。	①生徒会生徒及び顧問の努力により、参加生徒はほぼ全員が満足した。取り組みにより規範意識を醸成することができた。 ②1学年の部活動加入率は11%となり、50%近く加入する上級生に比べ低下した。体育祭9割や文化祭8割の参加率も、それぞれ1割づつ低下した。バスケットボール部が全国大会上位16に入賞した。	B ○各種行事に参加した生徒の満足度は高いが、行事を敬遠する生徒が増加傾向にある。また、低学年ほど部活動加入率も低い。部活動や生徒会活動を含め、特別活動に対する生徒の意識を研究する必要がある。
3	SST(ソーシャルスキルトレーニング)をはじめとする取り組みの結果、望ましい人間関係を望む生徒の意識が確立した。今後は「命の大切さ」教育に向けて校内支援委員会の活動を通して全職員で情報を共有することが課題である。	県教委の事業を通してSSTを推進し、生徒間の望ましい人間関係づくりを通して、不登校生徒や転退学者を減少する。	①就職支援アドバイザー、特別支援教育巡回支援員、サポートステーションを利用した取り組みを行う。 ②個別面談日(年5回)を設定し、生徒の実態を把握し、必要に応じてスクールカウンセラーを活用する。情報を共有する。	①生徒のコミュニケーション能力が向上したか。 ②スクールカウンセラーやソーシャルワーカーを活用し、不登校生徒、転退学者が減少したか。	①外部支援の活用により、個々の生徒の特性を踏まえた指導ができ、生徒のコミュニケーション能力は向上した。 ②スクールカウンセラー及び巡回支援員の効果的な支援により、帰国した生徒を除き、現在の退学者は4名で昨年度より減少した。(昨年度10名)	A ○効果を上げた支援と成果が出にくい支援があり、運用に工夫または精査が必要になっている。 ○外部支援によるSSTは1学年を対象に実施しているが、高学年にも必要な生徒がおり課題となった。
		校内支援委員会の構成の変更と教職員の情報共有を徹底し、あわせて、HRや集会で適切に「命の大切さ」を訴える。	①必要に応じて校内支援委員会を開催し必要な支援を検討する。 ②LHRにおいて「命の大切さ」について扱うとともに、集会時に管理職、生徒指導主任、人権教育推進委員会等から、命の大切さの講話を行う。	①校内支援委員会において支援を行った件数が向上したか。 ②生徒の言葉遣いや行動が改善し、学校生活に向かう姿勢が向上したか。	①委員会の開催形式を変更したことで効率的な運営と支援を行うことができた。支援の必要とする生徒数への対応は向上した。 ②HRや集会において計画的に「命の大切さ」を指導及び講演したほか、生徒の他者への言葉遣いや行動に配慮が見られ、生徒指導件数も減少し、学校生活に向かう姿勢は向上した。	A ○生徒が自分自身や他者への思いやる気持ちは向上している。今後の継続が重要である。 ○特別支援コーディネーター及び養護教諭の負担が急増している。 ○職員の負担と校務の効率化を目的に校内支援委員会の構成を再検討する必要がある。

学 校 関 係 者 評 価	
実 施 日 令和2年2月5日	
学校関係者からの意見・要望・評価等	
○来校者から、「予想以上に高いレベルの授業を行っている」という感想が多いことは評価できる。 ○生徒が主体的に参加する授業が今後も期待できる。	
○外部支援による指導が効果を上げていることは評価できる。 ○今後も外部の機関との連携を密にすることで、成績不振な生徒の減少を期待できる。	
○経済的な理由で進路希望の制約を受ける生徒が多い中でも、進学希望者が希望を達成していることは評価できる。 ○今後も計画的な進路指導が期待できる。	
○バスケットボール部が2年連続全国大会に出場したことは評価できる。 ○今後も成果にとらわれず、生徒会活動をはじめとする特別活動に期待できる。	
○退学者の減少は評価できる。 ○今後も個々の生徒の特性を踏まえた指導が期待できる。	
○教職員が生徒の実態を適切に把握していることは評価できる。 ○「命の大切さ」を理解する目標は達成できた状況にある。	